慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伊藤重次郎著 海運論 上巻
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.3 (1914. 4) ,p.375(121)- 379(125)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140400-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が外資輸入額に達せざる結果として、正貨の純流入を誘致し從つて正貨の過剩を釀すに至り、延ねて物價が不自然の騰貴を來たすことを憂へざる可らず。

されば、單に形式上の問題としては、正貨は流入しつゝあるを以て、正貨流出を論議するの要を見ず。而かも、正貨の純流入は巨額の外資を輸入せるの一結果なれば、現今に於ける我正貨問題の根本的解決は之を借金政策の得失に求めざる可からず。而して、借金政策は、日本の如き資本の缺乏せる國に取りては必要なるものなりと雖も、適度を超えたる外資輸入は利少くして害多し。加之、外資の大部分をば直接貨物の輸出增加を誘致す可き產業に投ぜざる可からず。如何となれば、若し外資の大部分をば不生產事業又は生產事業と雖も多年後に於て初めて收益を見るが如き施設に投入せんか、外資輸入の年度又は其翌年より直ちに支拂ふ可き外資の利子拂に差支を生じ、利子拂の爲めに更に外資を輸入するの必要を生ずるに至るの虞にあるを以て也。

批評と紹介

伊藤重次郎著『海運論』上卷

大正三年二月東京巖堂發行
菊判四七三頁定價金貳圓

本書は早稻田大學教授ドクトル、オブ、フイロソフイ伊藤重次郎氏の著述に係り、初版は明治四十四年七月、再版は同四十五年六月に上梓せられ、本年二月更に第三版を發行するに至れり。著者は曾て米國ペンジルベニア大學に遊び、同校教授にして運輸論の大家として其名東西に著はるゝジョンソン博士に就きて海運論を專攻し歸朝後其母校早稻田大學に於て運輸論等の講座を擔任するの傍ら時々專門雜誌上に於て海運に關する眞摯の研究を公にしつゝある篤學の士にして、現時海運論に於ては本邦有數の學者なり。而して本書は著者が其蘊蓄を傾倒せる苦心の著述にして大に見る可きものあるは蓋し偶然の結果に非ざる可し。

本書は之を第一編總論と第二編設備論とに分ち總論に於ては先づ海運の定義を與へ、噸、石、海里、節等の意義を明かにし、次に近海對遠洋、帆船對汽船、旅客對貨物、定期對不定期、命令對自由等の標準を用ゐて種々の海運業を分類し進んで海運の發達を敍述して、海運が第十九世紀に入りて初めて大に發展するに至れる原因と順序をば統計を擧げて精細に說明せる後、海運と生產、交換及び地代賃銀との間に於ける經濟的關係に論及して、海運が原料食料品等の價格を低廉ならしめ、其他一般の貨物の價格をして各國間に於て均一ならしむるの徑路を明かにし從つて貿易が海運に依りて刺戟せらるゝと同時に貿易の發達が海運を盛大ならしむるの所以を說き、更に海運が新開地の農產物の輸出を奬勵するの結果歐洲に於ける農作地の地代を低下せ

しむるに至れるの理を說述し、且つ勞働者の移住を容易ならしめ延ゐて各國間に於て賃銀を平均せしむるの傾向あるを指摘せり。著者は次に進んで海運業に於ける競爭と獨占とを論じ、先づ勞力、資本、商業品等が無智、風俗習慣の相違等よりして頗る國際的移動の緩漫なるに反し船舶の通路なる外海は各國民共有の公道にして從つて船主は隨時隨處に其所有又は供用せる船舶を自由に航行せしむるの權利を有するを說き其結果海運業は原則として獨占を許さゞる企業なるが故に、時としては斯業者間に激烈なる競爭を惹起することありて、終に却つて海運業者をして貨物並に旅客の分配、寄港地の分割、共通計算等に關する協定に依りて競爭を防止し、自ら一種の獨占的事業を經營するの已むを得ざるに至らしむることあるを指摘せり。最後に著者は筆を轉じて各國に於ける海運の研究に論及し、最近迄は海運の經濟的研究が振はざりし事實と原因を擧げ、更に細論に入りて佛、白、獨、英、米、日本の諸國に於ける重なる海運論の研究者の氏名と其著述を紹介し、最後に各國現存の參考書類を頗る精細に列擧批評して本篇を終れり。

第二編設備論に於て著者は帆船の種類を擧げ、其長所と短所を比較して速力、安全、旅客に對する設備等の諸點に於て帆船が到底汽船の敵手に非ざる結果として、十九世紀の初葉迄は海運を獨占せるも、汽船が初めて千八百七年中實用的に運轉せらるゝに至りし後、漸次汽船の爲めに壓倒せられ、今日に於ては世界各國に現存する帆船總體の運輸効率が汽船全體の運輸効率の二十分の一に過ぎざるの狀態を敍述し、次に技術上の立脚地より汽船に用ゆる推進機、汽機及汽罐の構造を說述し、船體の構造材料として木材の代りに鐵を用ひ、鐵の代りに鋼鐵を用うるに至りし經濟的理由を擧げ、同じく經濟的原因

の爲めに船型が益々增大するの傾向を指示し、次に船舶の等級、國籍を論じ、更に轉じて汽船の重要航路を列擧し、本邦に於ける所謂命令航路の現況を說ける後、世界の最大運河なる蘇士並に巴奈馬運河の沿革及び經濟的影響を細論し殊に巴奈馬運河の我國に及ぼす可き影響を說きて、其結果は一般に豫想せらるゝ程良好に非ざる可しと論斷せり。終りに海運と商港、商港と河川、運河並に鐵道との關係聯絡を敍して卷を結べり。

以上は本書內容の一班なるが、全卷を通じて常に外國の事例と日本の實狀とに留意し、彼に偏し此に私するの弊を避くるに努めたる所大に味ふ可きものあり。又本書載する所著者獨特の研究に成れるもの少からず。他書に據るものは皆其出所を明かにし、且つ各章末に重要參考書類を擧げ讀者の便に資する等著者の用意周到なるを示せり。本書が三版を重ぬるに至れるは蓋し故なきに非ざる可く、吾人は學界の爲めに斯くの如き眞摯の研究が公刊せらるゝを慶賀し、其下卷が日ならずして發表せられ益々同好の士を稗益するに至らんことを切望して止まざるなり。

吾人が本書の下卷が近き將來に於て上梓さるゝに至るを渴望するは此以外に他に一理由の存するあり。著者が總論中に於て述べたる所に據れば(一六六頁)、本書の目的は經濟的立脚地より海運を論ずるにあり。されど第一編に於て海運の發達並に海運業の競爭、第二編に於て帆船並に運河を敍說するに當りて經濟的見地を採れる外は各章の所論は概ね技術的方面に重きを置けり。殊に汽機、船體、船舶の等級及國籍に關する記述に於て然りとす。汽機、船體等の技術的說明は固より可なりと雖も、海運の經濟的方面を論叙するに當りて最も重きを置く可き貨物の運賃、乘客の賃金、兩者相互間の關係、速力と此

兩者の交渉、貨物船對客船の比較、貨客運送の現況、企業としての海運等に就きては隨處に著者の意見を窺知するを得るのみにして、精細なる研究は見ることを得ず。されど此種の研究は下卷に載せらるゝ筈なる可し。是れ吾人が其下卷が一日も早く出版せらるゝに至るを切望する所以也。

經濟的立脚地より海運を論ずるに當りて、海運の基礎たる船舶を技術的に説明するは勿論至當なることなる可し。されど、本書の如く帆の形狀、推進機、汽機、汽罐、タービン機等に關して稍々精細なる技術的説明を與ふるの必要に就きては聊か疑ひなき能はざるなり。殊に汽罐室以外に於ける船艙、客室等の貨客に對する設備に關する精略なる敍説を省略せるに於てをや。又、推進機、汽機、タービン機、汽罐等に關する本書中の説明は當業者に取りては餘りに簡易なると同時に門外漢に對しては餘りに專門的に

亙れるに非ずや。門外漢に對しては此等の説明に圖解を加ふるを得策とす可きに、本書に此事なきは惜む可し。タービン機説明の一節には一圖解を挿みたるも、此簡單なる圖解に依りて素人が其構造と運用とを會得するを得るや否やは疑問なりと謂ふ可し。評者は曾てタービン機を實見したる經驗を有するを以て、著者の説明が略ぼ可なるを知れり。されど、此經驗を有せざる者に對して船舶諸部の技術的説明を與ふる以上は一層詳細なる解説を與ふるを得策とせずや。

我國に於て出版せらるゝ書藉、雜誌等に誤植の多きは吾人の甚だ遺憾とせる所にして、評者自身も之に就きて幾多苦き經驗を有せるが、本書に比較的此缺點少なきは慶賀す可し。(二〇三頁一行鐵は木材に非ずや。又、二二六頁六行に一八九三年とあるは一七九三年の誤植なる可し。横文字の誤植は不幸にして少數なりと云ふを得ず。)

日清戰爭以來長足の進歩を遂げたる我海運業は巴奈馬運河の開通と共に益々多事ならんとし、殊に該航路の補助が一大問題となれる今日に於て假令完璧ならずとするも本書の如き頗る健實なる海運論の上梓せられたるは評者の讀者と共に欣賀せざるを得ざる所にして、吾人は斯學に關する一好參考書として之を江湖に推擧するを辭せざるなり。本書に對して評者が呈したる蕪言の如きは望蜀の念より來れるものなるのみ。

（高城）

山田伊三郎譯補『國民經濟學原論』第一冊

大正三年二月東京富山房發行
菊判四六九頁定價壹圓六拾錢

本書は彼の有名なる獨逸經濟學者シュモラー氏の『國民經濟學原論』Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre）の邦譯にして、東京高等商業學校教授文學士山田伊三郎氏の筆に成るものなり。原著は經濟學の立脚地より人間の社會的生活の全部を説明せんと試みたるものにして、其論據たる可き經濟學の原理其物に對する著者の研究には特筆するに足る可きものなしと雖も、在來の抽象的又は局部的講究の範圍を脱して社會全般に於ける人間の經濟的活動を討究するに努めたる點に於て、經濟學上一新局面を開拓せる一大著述なりと謂ふを得可し。原著は最初千九百一年に上梓せられ其後數版を重ねたるが、山田氏の用ひたる原本は初版なり。